

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-131	12-028	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Alcohol use and binge drinking among women of childbearing age-United States, 2006-2010. アメリカにおける妊娠可能年齢の女性における多量飲酒と飲酒：2006－2010年		
執筆者		
Centers for Disease Control and Prevention (CDC)		
掲載誌		
MMWR Morb Mortal Wkly Rep. 2012 Jul 20;61(28):534-8.		
キーワード		
妊娠中飲酒、胎児アルコール症候群、妊娠可能年齢		
要 旨		
<p>目的： 予防可能な先天性異常および発達障害のうち最も多い原因は妊娠中の飲酒である。妊娠中の飲酒は、生涯にわたって続く先天性の障害である、先天性の神経系脳障害である胎児アルコール症候群や、様々な胎児障害(胎児性アルコール・スペクトラム障害)を引き起こす。米国公衆衛生局長官は 2005 年に、妊娠中および妊娠の可能性のある女性に対して飲酒を控えるようにとの勧告を行った。また“Healthy People2020”においても妊娠女性について飲酒 (MICH-11.1) および大量飲酒 (MICH-11.2) を行わないよう目標を掲げている。</p>		
<p>方法： 米国疾病管理予防センター (CDC) は、18－44 歳の女性の過去 30 日における飲酒及び多量飲酒 (binge drinking、短時間で多量の飲酒) の頻度を明らかにするために、2006 年から 2010 年の Behavioral Risk Factor Surveillance System (BRFSS) データを解析した。</p>		
<p>結果： 自己申告のデータから推定した飲酒率は非妊娠女性が 51.5%、妊娠女性が 7.6%であった。多量飲酒は非妊娠女性の 15.0%、妊娠女性の 1.4%に見られた。妊娠女性の推定飲酒率が高い群は 35-44 歳 (14.3%) の白人 (8.3%)、大学卒業者 (10.0%)、あるいは労働者 (9.6%) であった。多量飲酒のうち、飲酒回数および一回当たりの飲酒量は非妊娠者・妊娠者ではほぼ同様であり、一か月におよそ 3 回で、一回に 6 ドリンク (1 ドリンク＝アルコール換算 12～13g) の飲酒であった。</p>		
<p>結論： 臨床現場における妊娠中の飲酒に関連したリスクに関するアドバイスとともに地域レベルでのアルコール関連障害を軽減する介入が、妊娠可能な女性における胎児性アルコール障害を減らすために、そして Healthy People 2020 の目標を達成するためには必要であろう。</p>		